

序 文

鹿児島大学南方海域研究センター刊行による本冊子、Occasional Papers（南方海域調査研究報告）No. 6は、昭和59年2月6日（金）本大学本部棟第3会議室において、当研究センター主催による第23回月例研究会、シンポジウム「熱帯と肝臓病」の講演記録である。

シンポジウムは鹿児島大学南方海域研究センター長（当時）、岩切成郎教授（鹿児島大学水産学部海洋政策学）の開会の辞によりはじめられ、橋本修治教授（鹿児島大学医学部第二内科学講座）を座長に御迎えて、3つの演題についての発表があった。

講演者はつぎの4名であった。

小林 昭 鹿児島大学農学部教授，農芸化学科

寺 師 慎 一 鹿児島大学南方海域研究センター教授，第3課題

志 方 俊 夫 日本大学医学部教授，病理学

長崎大学熱帯医学研究所教授，防疫部門

板 倉 英 世 長崎大学熱帯医学研究所教授，病理学部門

講演内容は肝臓病という医学領域であったにもかかわらず、学内の各学部および学外からも多くの方々の御参加をいただき約80名にもものぼる研究会となったことは、企画・担当者としてこの上ない喜びであった。これも疾患の一部には必ずしも熱帯域に限らず現に日本でみられる疾患も含まれていたことや、今後ともに熱帯との深い関わりをもって研究生活をおくられる先生方、さらに一般の方々でこの方面に関心を示して下さったことの現われだと思っております。

この講演は熱帯がその対象地域ですが、この分野は従来鹿児島大学が伝統的に南方に開かれた研究分野を有する学者も多く、現地の研究者とともに日夜を汗して学問的進歩と現地への貢献をしてこられた先生方の成果が沢山みられるところであります。

今回は熱帯病の中から肝臓病をテーマといたしました。日ごとに文明のすすんでいるいまでも発展途上国では、いまだにこの種の疾患の蔓延度が高くその原因に衛生施設の不備や食事の影響があるため熱帯で生活するときは常に自己防衛の必要性に迫られることは充分考えられます。

本誌はそのときのための記録であるとともに、また当日御参加いただけなかった先生方へ、この講演会の雰囲気とその内容をお伝えする意味で編纂されたものです。「熱帯と肝臓病」というごく限られた範囲でしかありませんが、今後のフィールドワーク、あるいは海外調査・研究にあたっての予備知識に幾らかのお役にたてば幸いです。

最後に、このシンポジウムには病の身をおして共同演者としてご参加をいただき、また過去の私たちの実験にも全面的にご協力をいただき、そのソテツ種子配糖体“Cycasin”をLife workとされ多大な業績を学会史上に残され、今後のなお絶大なる期待をもたれながら研究半ばにして昭和59年10月他界された鹿児島大学農学部農芸化学科、小林 昭教授にこの冊子を捧げます。

昭和60年5月1日

編者しるす